

— NO212 9月号

FOREST NEWS

未来を育てる木を植える
未来を守る木を植える



2025年度 指標

- ①パンタナール地域における潜在自然植生の混植密植形式の植樹の実施
- ②国内において累計500本の植樹活動
- ③植樹を通じた環境問題解決のロールモデルをつくる
- ④セミナーや植樹祭を通じて「家族で木を植える」文化の啓蒙
- ⑤混植密植の植樹を推進する他団体との連携

NPO法人 地球の緑を守る会

発行人 藤生輝彦

〒182-0021東京都調布市調布ヶ丘2-15-1ビリアベルデ407号

Tel:042-449-0183

ホームページ <http://midori.mond.jp/>



理事長メッセージ

旅が自分を育ててくれた

2001年、私は初めてブラジルを旅しました。サンパウロに、かつて日本人街と呼ばれた一角があり、そこに日系人経営の小さな書店がありました。そこで出会ったのが、ブラジルの詩人ランジェールの『緑の地獄』という作品でした。

『アマゾンの女神は 誠の心をもってアマゾンを愛し アマゾンと生死を共にし アマゾンの発展を自己人生の 最大の喜びとする人々に対しては 惜しみなくその宝庫の扉を開くであろう また将来必ずこのような人々が来るであろう しかし略奪することのみを計る者に対しては アマゾンは緑の地獄となって 彼らを阻止するであろう』

25年前のことですが、私はこの詩を今も愛しています。私が地球環境問題に残りの

生涯をかけようと決心したのも、この詩との出会いがあったからです。

そして、帰国後の2004年、東京都認可の環境NPO「地球の緑を守る会」を立ち上げました。今なおアマゾンの森への憧れを抱き続け、数限りない困難に出会いながら、1本でも多くの木を植えるため、ウルグアイ、パラグアイ、アルゼンチン、ブラジルなど南米大陸を16往復しました。サンパウロのバスターミナルで、窃盗団に夫婦の全財産を奪われたこともあります。しかし、82歳の私が今なおアマゾンへの夢を追いつけているのは、この詩に出会ったためです。そしてまた今の私があるのは、まぎれもなく、これまで世界13か国を歴訪したその旅のおかげだったと思っています。私にとって旅が人生の最良の師だったのです。

「そんなに言うなら、やってみれば」

—女性社員の情熱が動かしたスズキ初の植樹活動—

宮脇式植樹を敷地内で行いたい

スズキ横浜研究所にて、車両開発以外の部署が主導する初の植樹活動が、工場敷地内の3か所で限定的に実施された。活動は3回に分けて行われ、社員と専門家による地道な挑戦が展開されました。

発端は、植生工学士の資格を持つ女性社員（Oさん）による提案です。「宮脇式植樹を敷地内で行いたい」との熱意は、当初社内でほとんど注目されませんでした。粘り強い働きかけにより、工場長が「そんなに言うなら、やってみれば」と許可され、社内で正式に予算がつき、プロジェクトが本格的に始動しました。

Oさんは自動車の研究所にしながら自動車の開発以外の業務を担当しています。自動車は便利さをもたらす一方で、環境に負荷をかける存在でもあります。彼女の担当は、その現実を踏まえ、企業として社会にどう向き合い、どんな対策を講じていくかを考え、形にしていこうことでした。

「研究所内にドロを持ち込むなよ」

植樹活動には、スズキ社員4～5名と、植生工学士のボランティア7名が参加して行われました。

第1回目（8月6日）の植樹では、スコップが入らないほど硬い土壌に直面。気温は35℃前後という過酷な環境の中、参加者たちは何度も何度もスコップを打ち込み、ようやく土を耕すことができました。

第2回目（8月20日）では、ユンボを投入。作業効率は向上しましたが、ユンボが入れない狭所では再び人力での掘削が必要となりました。

あまりの暑さと土の硬さにより、Oさんの配慮で研究所内の部屋を借り、身体を冷やしながら作業を続けました。

しかし、泥にまみれた服でいくら汚れを落として入室しても、廊下や部屋に植樹作業の泥が残ってしまい、他の社員からは「社内にドロを持ち込むな」といった声も上がりました。



研究所職員が植樹される

庭のような敷地でも植樹できる

そして迎えた第3回目。苗木を植える段階で、工場内の有志社員を募り、15名の社員が植樹活動に参加しました。最初は引き気味だった参加者も、苗木を植えていくうちに自然と笑顔がこぼれ、「いやー、いい汗かいたわ」と声が上がる場面も。やはり実践に勝る啓蒙はありません。

Oさんは「まだ植樹できそうな場所はたくさんあります。日本の工場、そしてインドをはじめ海外の工場でも植樹を実現したいですね」と夢は大きい。当法人も負けられません。



研究所の玄関前に植樹された

能登・七尾タブの木植樹プロジェクトの進捗

偶然が偶然を呼び..

スズキ研究所の植樹地で土を耕していたとき、隣で作業していたIGES-JISE国際生態学センターの目黒先生に「竹林って、どのくらい耕せばいいんですか？」と聞くと

「うーん、70cmぐらいいは掘りたいね。」そのあと「ところでなぜそんなことを聞くの?」「七尾で植樹を考えているんです。今は竹林なんですけど、その前は農地だったのでなんとかかなるかなと。考えていても進まないの、とにかくやってみたいんです」

その会話にベテランのボランティアが「七尾? いいですね。タブの木の里、七尾に植えたいですよ」

何気なく聞いたことから当法人としては初の主催開催、七尾の植樹の話が盛り上がりました。不思議です...

タブのキが持つ地域文化とのつながり

タブの木は全国に分布しますが、能登では“ただの木”ではありません。神社の鎮守の森や海辺の祈りの場に静かに根を張り、海からやってきた神を迎える木として語られてきました。地域の人々の精神や信仰と深く結びついています。

その象徴が毎年8月27日、中能登町藤井の住吉神社と七尾市江泊町の諏訪神社などで行われる「鎌打ち神事」です。この神事では、氏子たちが神木のタブノキに鎌の刃を打ち込み、五穀豊穡や無病息災を願うものです。



緑化を超えた文化的・精神的な営み



七尾の植樹予定地の竹林

当法人が初めての植樹地として石川県七尾市を選んだのは、いくつかの偶然が重なった結果です。能登半島地震の被災地支援で七尾に訪れたこと、当法人の会員が七尾に土地を所有していたこと、そしてその方が植樹活動に関心を持っていたこと——これらの要素が自然に結びつき、七尾での植樹が実現する運びとなりました。

しかし、七尾という土地でタブの木を植えることには、偶然以上の意味があると感じています。

七尾でタブの木を植えるという行為は、単なる緑化活動ではなく、土地の記憶を受け継ぎ、未来へとつなぐ文化的・精神的な営みであると捉えることができます。当法人にとっても、地域の歴史や信仰に寄り添いながら環境再生に取り組むという、新たな意味と責任を伴うプロジェクトとなっています。



七尾の植樹予定地に生えている広葉樹